

令和元年6月19日現在

機関番号：33804

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K15179

研究課題名（和文）手術を勧められた若年性子宮頸がん患者の情報リテラシー能力育成プログラムの構築

研究課題名（英文）Development of information literacy training program for young cervical cancer patients

研究代表者

氏原 恵子（UJIHARA, KEIKO）

聖隷クリストファー大学・看護学部・助教

研究者番号：70645431

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は「手術を勧められた若年性子宮頸がん患者の情報リテラシー能力育成プログラムの構築」である。研究代表者が所属する患者会の研究協力の得られた対象者にインタビューによるデータ収集を行い、得られたデータを分析し、以下のような結果が得られた。若年性子宮頸がん患者の情報収集のツールはインターネットが主であった。対象者を若年性子宮頸がん患者に焦点化したことで若年者の情報収集行動の特徴を捉えることができ、「正しい情報を得る力」「情報整理をする力」「情報を自己の個別に照らし活用する力」の3つが情報リテラシー能力育成プログラムの中心となることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究対象者を若年性子宮頸がん患者で自助グループに参加している患者とし、発症時の情報収集行動に焦点をあて、その体験をデータとした点が本研究の特徴である。情報収集はインターネットや書籍をツールとして行われていたが、膨大な情報量からどのようにして疾患の正しい理解、治療場所や治療法の選択などにつなげていったのかをデータから分析した。情報リテラシー能力育成により患者が納得して治療を受けることや意思決定支援、医療者とのコミュニケーションにも有効であり、また、若年性子宮頸がん患者以外のがん患者にも応用できると考えられた。AYA世代のがん患者支援の一助になると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is "Development of information literacy training program for young cervical cancer patients who are recommended to have surgery". We collected data from interviews with subjects who obtained research cooperation from the patient association to which the research representative belongs, and analyzed the obtained data. The following results were obtained. The tool for collecting information on patients with young cervical cancer was mainly the Internet. Focusing on the target person to the juvenile cervical cancer patient can capture the characteristics of the information gathering behavior of the young person, "power to obtain correct information", "power to organize information", "information to individual oneself" It turned out that three of "power to use in the light" become the center of information literacy ability development program.

研究分野：がん看護学

キーワード：若年性子宮頸がん 患者会 情報リテラシー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 我が国においては、年間約 15,000 人が子宮頸がんを発症し、その罹患原因は性的接触によるヒトパピローマウイルス (human papilloma virus :HPV) の感染であることが明らかとなっている。子宮頸がんの罹患は 10 歳代半ばから始まり 20 歳代に急上昇し、30 歳代後半にピークとなり、以降漸減する。子宮頸がんは、20 歳代、30 歳代の女性の中では最も発生率の高いがんとなっており、将来の妊娠・出産等妊孕性への影響が非常に大きな疾患であるといえる。国立がん研究センターがん対策情報センターの「患者必携・患者さんのしおり」の「がん情報探しの 10 カ条」では、がん医療の情報源としてインターネット(以下「ネット」)の利用を推奨している。ネット利用者は 9,000 万人を超えており、医療関連情報についても、ネットによって容易に入手可能となった。申請者が行った研究(2011)においても手術を勧められた若年性子宮頸がん患者の多くがネットから情報収集をしていた。周囲に同病者がいないことや本疾患が性的接触による HPV 感染が原因であること、また、手術により生殖機能を喪失するかもしれないという危機感から、自分と関係性を持たない他者からネットを通して情報を得るといった行動をとったのではないかと推察される。しかし、入手した大量情報を効果的に活用するどころか、情報の取捨選択ができず、情報に翻弄される状況がみられた。後藤(2010)は「医療者が患者と接するとき、インターネットによって患者が正しい情報を手に入れて闘病に役立てていると感じることは少なく、むしろインターネットの情報に惑わされている患者とその家族が多い」と述べている。手術を勧められた若年性子宮頸がん患者の多くがネットを利用して情報収集をしている現状から、患者の情報リテラシー能力向上のための育成プログラムの構築は急務のことと考えられる。

(2) 患者会に参加する研究対象者は既に治療を終了している患者であり、日常生活に戻りながらも治療後の身体的苦痛を持っているものが多く、その対処方法や今後の治療の選択について「正確な情報」を求めて患者会に参加していた。

2. 研究の目的

本研究は、若年性子宮頸がんのために子宮頸部円錐切除術(以下「手術」)を勧められた若年性子宮頸がん患者の情報リテラシー能力育成プログラムを構築することを目的とする。次の ~ を明らかにし、その結果に基づいて情報リテラシー能力育成プログラムを構築する。

手術治療を受けることを自己決定する際に必要となる情報の収集方法

収集した情報の活用方法

情報収集時の苦悩や困難

情報が治療や日常生活に与えた影響

3. 研究の方法

平成 27 年～28 年度：自助グループ(患者会)に参加する初期治療として子宮頸部円錐切除術を受けた若年性子宮頸がん患者が手術治療を受けることを自己決定するための必要情報、情報収集方法、情報活用方法、情報収集時の苦悩や困難などを明らかにする。

平成 29 年度：自助グループ(患者会)へ参加している患者の体験に基づき、若年性子宮頸がん患者の情報リテラシー能力育成プログラムを構築する。

方法：若年性子宮頸がん初期治療として子宮頸部円錐切除術を受けた後に患者会に参加している患者約 20 名を対象として半構造化面接を行い、面接内容の逐語録をデータとして

M-GTA の手法を用いて分析する。手術を勧められた若年性子宮頸がん患者の情報リテラシー能力育成プログラムを構築する。

4. 研究成果

面接内容の逐語訳をデータとし、M-GTA の分析手法を用いて質的帰納的に分析を行った。

(1) 対象者の概要

研究に同意が得られて対象者は5名で、手術療法を受けた時の平均年齢は31.8歳であった。

治療時の婚姻状況は既婚者が3名、未婚者が2名であった。3名の既婚者のうち1名は子がいた。5名全員が子宮全摘の手術を受けていた。

(2) 手術治療を受けることを自己決定する際に必要となる情報の収集方法

インターネット、書籍が主たる情報収集ツールであり、ホームページ、ブログなどから情報収集をしていた。5名中1名がツールとして何も利用していなかった。

(3) 収集した情報の活用方法

治療法の選択、疾患の理解、今後の見通しなどの予測するために活用していた。また、情報を自己の個別に照らし、精神的なよりどころとしていた。

(4) 情報収集時の苦悩や困難

インターネット上の膨大な情報量に圧倒されていた。若年でがん罹患をしたことそのものが衝撃的なことであり、治療の選択と命を守ることを同時に考えなければならないことが患者の苦悩となり、治療の意思決定を困難にさせるものであった。

(5) 結果・考察

1) 若年性子宮頸がん患者の体験

生成された概念は15概念であり、4つのカテゴリーが生成された。<>は概念、【】はカテゴリーで示す。

若年性子宮頸がん患者の情報収集はインターネットと書籍を利用して行われていた。対象者たちの情報収集は<命を守るための情報収集>であった。<海外の情報まで求める>行動も見られ、若年性子宮頸がん患者にとって情報収集は【命と向き合う時間】でもあった。多くの情報を得ることは必要なことであるが、<情報を整理して活用できない>ことが見られた。<情報量の多さ>と<時間的余裕の無さ>、<妊孕性温存への強い思い>から<簡単に意思決定できない>ことがより一層<情報を整理して活用できない>状況を生み、【情報を意思決定に繋がられない】状況となっていた。<フォローの無いネットの世界>であっても、周囲に同病者がいない対象者にとって<欲しいのは体験者の言葉>であった。若年でがん罹患したことの絶望、<生き地獄を生きる>苦悩の日々の中で目にするブログの体験談は、重要な情報源であるとともに、時に正常な判断や疑う余地も奪う。その結果<ブログの信者>になり、情報の<出所確認>をすることもなく【信じたい情報を信じたいように信じる】といった状況を招いていた。一方、医療者から<長く生きるための治療選択>であることを説明され、ネガティブなネット情報には<自分とは別物>として情報の精査をしていた。若年性子宮頸がん患者は周囲に同病者がいないこと、また、女性特有の疾患ということが他者に相談することを躊躇させるなど、孤立することも少なくない。そのような中で体験者の語りから現実と<向き合うことを後押し>されることもあり、【情報を活かす努力】へと変化していった。

15概念と4つのカテゴリーで若年性子宮頸がん患者の情報収集行動と苦悩や困難との

関係性、体験を明らかにすることができた。

若年性子宮頸がん患者の情報リテラシー育成には、「正しい情報を得る力」「情報整理をする力」「情報を自己の個別に照らし活用する力」を取得することが重要であると考えられた。

2) 若年性子宮頸がん患者の情報リテラシー能力育成プログラムの構築

情報リテラシーとは受け取る情報をうのみにせず、本当にそんな風に考えてよいのか、何か落とし穴が無いのかなどを、気を付けながら見直す事である(中山、2014)。健康や医療に関する情報は不確実な部分が多い。その不確実な情報から治療法の選択を意思決定することを患者たちは求められている情報収集ツールとして多くの人たちが利用し、特に健康や医療に関する情報はインターネットから収集することが当然のこととなっている現代において、インターネットは既に生活の一部になっていると考えられる。インターネット上の不特定多数に向けられた情報に接するときは、自分なりにシロとクロを付ける基準を持つことが重要であると言われている。情報はいつまでも灰色であり、実際には意思決定までの時間は極めて限られている(中山、2014)ため、灰色の情報の中でも行動を起こすことが求められる。若年性子宮頸がん患者の意思決定には情報が影響しているが、緊迫した状況下では得た情報の真偽を見極めることは不可能であり、灰色の情報を基に意思決定することが求められていた。一方、情報とは意思決定において不確実性を減ずるもの(C.Shannon, 1948)でもあり、正しい情報を得て、その情報を整理して、自身の目的に適合するようにしていくことができれば、より質の良い意思決定につながると考えられる。

若年性子宮頸がん患者が置かれている状況下で「正しい情報を得る力」を身につけるためには5W2Hが重要であると考えられる。5W2Hは「何を」「誰が」「どこで」「いつ」「どのくらい」「なぜ」「どのように」である。この5W2Hについて情報収集前に確認することで、情報に翻弄されることは最小限にすることができると考える。この5W2Hについて確認することは情報整理をする力にも関連する。また、インターネットのみの情報収集に偏らず、書籍を利用した情報収集を行うなど利用可能なツールをバランスよく使用して情報を得ることが重要であると考えられる。

「情報を整理する力」を得るためには「読みっぱなし」にしないことである。5W2Hで収集した情報をキーワードやアドレスと共に情報収集時の自己の症状や病状、その時の医療者からの説明、家族や仕事に関することなどと一緒にノートしておき、いつでもそれを読み返すことができるようにしておくことが重要である。情報には事実と意見・解釈や意図・意思が混じっている(野崎、2018)。事実と意見・解釈の違いを意識して情報を整理する。体験談などはあくまでも“その人”の体験であり、体験者の価値観や人生観などが混在していることが多いと考えられる。情報収集時にはその体験談の内容すべてが“正しい”と感じても、時間の経過とともに読みかえすことで真偽に気づくこともある。「正しい情報を得る」ことにも関連すると考えられる。

「情報を自己の個別に照らし活用する力」を得るためには、整理した情報を医療者と共有することである。限られた時間の中で医療者との効果的なコミュニケーションをとるためには情報は有効である。患者自身で得た情報を整理し、医療者と相互に確認をしていくことが重要である。そして自身の病期・治療法について正しく認識することで、納得した意思決定に繋げていくことができると考える。

(6) 結論

1. 若年性子宮頸がん患者はインターネットを主に情報収集をしていた。
2. 【命と向き合う時間】【情報を意思決定に繋がられない】【信じたい情報を信じたいように信じる】【情報を活かす努力】の4つのカテゴリーが得られた。
3. 若年性子宮頸がん患者の情報リテラシー能力育成には「正しい情報を得る力」「情報整理をする力」「情報を自己の個別に照らし活用する力」を得ることである。

(7) 引用・参考文献

- 中山健夫、健康・医療の情報を読み解く、丸善(株)、2014
- 中山健夫、EBMの普及と医療リテラシー、日本内科学会雑誌、Vol.101、No.12、3600-3606、2012
- 野崎篤志、調べる力、日本経済新聞出版社、2018
- 朽木誠一郎、健康を食い物にするメディアたち、ディスカヴァー・トゥエンティワン、2018
- 中神克之、赤石恵子、症状発現から発見までにおける術前消化器がん患者のヘルス・リテラシーの発揮、日本看護科学会誌、Vol.30、No.3、13-22、2010
- 健康を決める力、<http://www.healthliteracy.jp/> 2017.8.14
- 中山和弘、ヘルスリテラシーと情報を得た意思決定の支援、保健の科学、Vol.54、No.7、447-453、2012
- 木下康仁、グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践、弘文堂、2003

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 1件)

氏原恵子、森恵子

Sufferings by young cervical cancer patients who were recommended surgery and their information gathering. 国際がん看護学会、2018

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：森 恵子

ローマ字氏名：MORI,KEIKO

所属研究機関名：浜松医科大学

部局名：医学部看護学科

職名：教授

研究者番号（8桁）：70325091

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。